

# 田原氏の犯罪

豊島与志雄

青空文庫



## 一

重夫は母のしげ子とよく父のことを話し合った。それは、しげ子にとっては寧ろどうでもいい問題であったが、重夫にとっては何かしら気遣わしい、話さないではおれない問題であった。

実際、重夫の父田原弘平は凡てに於て觀照家でそして余りに寛大であった。然しそれはいいことであつたかも知れない。ただ重夫が氣遣わしく思つたのは、物にぶつかつてゆ力を欠いだ父のそうした生活態度を通して、父のうちに或る空虚が濺んで來ることであつた。其処に眼を向けるのは氣味悪くまた恐ろしかった。然し重夫はそうせざるを得なかつた。

「この頃お父さんはよく夜中に起き上つて庭を散歩なさるではありませんか。」  
重夫は母にそう云つた。

「いえ夜中と云つてもそれは朝の四時か五時頃なんですよ、」としげ子は答えた、「暑くなる朝早く起きる方が身体にいいと云つていられるのですよ。お前さんのように寢坊す

るよりはね。」

彼女は微笑んでいた。何事にも穏かな素直な微笑みを洩らすのは彼女の癖であった。いつも善意に、いや寧ろ善意とさえも云えない穏かな気持ちに満ちている彼女は、心持ち痩せてはいたが、常に若々しくまた清らかであった。その切れの長いそして細い眼に生命の余裕を示していた。

「然し、」と重夫は云った、「お父さんの早く起きられるというよりも眠れないから仕方なしにお起きになるのではないでしょうか。」

「さあねえ、私にはよくお眠りになるように思えるんですがね。何かそんなことを仰言っていたことがありませんか。」

「別に何にも云われはしません……。いつでしたか私が夜遅くまで起きて書物を読んでいまして、それから寝ようと思って縁側を通る時に、まだ寝ないのかって室の中から声をおかけになったことがあります。そんなことがよくあるんです。何だかお父さんはいつも眼が覚めていらるるようなんですが……。」

「それは眼敏めびとくていらるる故せいなんでしょうよ。元からそうでしたよ。それに年を取って来ると猶更なほそうなるものです。」

「然しまだ四十の上を幾つも越してはられないじゃありませんか。」

「年齢としを云えばそうですがね、四十の上になると自分では随分長く生きたような気がするものですよ。」

「ですが……そう、つい先達てのことですよ。私が友達と日曜に朝早くから江の島の方へ遊びに行ったことがありましたでしょう。あの朝のことです。五時頃に起き上って、楊枝を使いながら縁側に立っていますと、お父さんがじつと庭の向うに立っていられたのです。後ろから見ると急にひどく髪の毛が薄くなられたような気がして、妙な気持ちでしたので。が、いつまでもお父さんはじつと向う向きに立っていられます。それがこう妙に空洞うつろな老木の幹を見るような感じがするのです。まだ朝日は射していませんでしたが、あの向うの植込みの下まで透き通るような明るみに夜が明け切っていました。私は何とも云えないような気持ちになって、じつとお父さんの後姿を見ていますと、急に私の方をふり向かれて、『珍らしく早いね。』と云われました。前から私が見て居るのを知っていられたのに違いないんです。皮肉なような妙な笑顔さえ浮べていられたのです。それで私はすっかり狼狽まじいてしまって、『もう夜が明けてしまったんですね。』と変なことを云ってしまいました。するとお父さんはじつと遠くから私の眼の中を覗くようにして、『そうだ、この

頃は四時頃にもう少し明るくなるんだ。お前なんかはそんなことは知らないだろう。』そう云われて、また前の皮肉なような笑顔をされるのです。それから、私が黙っているのを押し被せるようにして、『早く支度をしないと遅くなるよ』と云われたまま、また向うを向いてしまわれました。私はその時、何だか大変悪いことをしたような気がして、何とも云えなかったのです。実際変な気がしたんです。」

「だってそれは何でもないことではありませんか。」

「ええ別に何でもないことですけれど、それでも……。」

重夫の心のうちには何か「何でもなくないこと」が在ったけれど、それが余りに漠然としていたので口に出してははつきり云えなかった。

「だが変だと云えばお前さんも変ですね。」

「なぜです?」

「でも妙な考え方をするではありませんか。」

「然しお父さんの姿がそんな考え方をさせるんですから。」

「それでは二人共変なんですね。」

しげ子はそう云ってまた微笑みを洩らした。然し彼女もそれきり口を噤んで、庭の方を

透し見るようにした。

東に面した庭には午後の日脚は軒に遮られて落ちてはいなかったが、それでも暑い日光の漲った空の反映を受けて、植込みの影の空気まで暑苦しく乾燥しているように思えた。木の葉がばさばさしている、植木鉢の土が乾き切っている、そして高地芝の間の飛石が如何にも白い。

「今年は暑そうですね。」と重夫がふと云い出した。

「そうねえ、六月でこんなだから。」

「今年は皆で山へ出かけようではありませんか。」

「私も何処かへ出かけたと思いますけどね。でも同じ行くなら海の方がよくはありませんか。」

「海は頭が悪くなつていけませんよ。」

「また頭ですか。」そう云つてしげ子は眼を挙げて重夫の顔を見た。「お前さんはいつも頭のことばかり心配していますね。」

「それは僕等のような若い時は、頭が一番大切なんですから。」

その時二階の梯子段に足音がした。父が下りて来るのであった。それをきくと二人共妙

に口を嚙んでしまった。然しそれは別に父を憚ってではなかった。自然に二人の心がそちらへ引きつけられたからである。

父は重い足どりで歩いて来て二人の所へ顔を現わした。

「お眼覚めですか。」としげ子が云った。

「ああ。」

「今日はわりにお早いですね。」と重夫が云った。

「それでもぐつすり寝入ってしまった。昼寝はよくそして短く眠るに限るね。」

然し乍ら、田原さんは如何にも陰鬱な顔をしていた。濃い眉根から広い額へかけて、彼がいつも怒った時に示すようなかすかな堅皺が寄っていた。そして長く濃い口髯に半ば隠された口元には、意力の欠乏を示す空虚が漂っていた。

「誰も来なかつたか。」

「いえどなたもお見えになりません。」

田原さんはその答えをきいて、軽く頭を横に傾げた。それから冷たい水で顔を洗うために勝手許へ行つた。

水で顔を洗い、それから頭まで洗つてみると、田原さんは先刻の感情がいつしか消え失



せて、頭の中が妙にぼんやりしているのを感じた。然しそれはまだいくらかよかった。

先刻の感情と云うのは、彼が昼寝から覚める時に覚えた感情である。

何か淋しい引入られるようなものが彼の心にふうわりと被さつて来た。それは単なる情緒ではなかつた。淋しい佗びしいそして頼り無いようなものが、彼の心の上に煙のようにふうわりと投げかけられたのである。で彼は本能的にそれを脱しようとして眼を開いた。然し彼はまだその時まで半ば眠っていたのである。そして彼が脱しようとしたその寂寥たる或物が、また引き入れるようにして彼の眼瞼を閉じさせた。彼は全身微睡ましろうみながら、覚めかかつた心をじつと、その或物へ集中した。じつとしているに堪えられないような、それでもじつとしていなければならぬような、荒涼たる感じが彼のうちにその時湧いて来た。それは、空虚な柔い擦つたいような苦悩であつた。そしてそれに身をうち任している。と彼はそよそよと微風が自分の上を流れてゆくのを感じた。その時には彼は再び眼を開いていた。開け放した二階の室から、庭の木立の梢が見える。緑葉がちらちらと動いている。その向うに青い空が在る。空の中にぽつりとち切れた雲が一片浮んでいたが、それがすぐに蒼空の奥に消え去つてしまふ。それが如何にも静かである。静かでありながら如何にも雄大な推移である。雄大な推移でありながら如何にも頼り無く佗びしい。雲の消え去つた

大空から、生温い微風が流れてくる……。

彼は毛布を足先ではねのけて、枕の上に半身を起してみた。それが非常な努力に感じられた。そして両手を伸すと共に、大きく欠伸を一つした。その欠伸が彼にはつきり胸の空虚を感じさせた。何かが自分のうちから掴み去られたがようであった。全身の筋肉がぐたりとしていた。それが如何にも静かでそして頼り無かった。その時彼の心のうちに懶い憂鬱が濃く澱んで来た。

彼が見たのは、大自然のうちに流るる静かな推移でもなかった。大空の下に置かれた人生の卑小でもなかった。然しあるがままの生の懶さ淋しさであった。それは、「今日もまた暮れた、明日もまた明けるであろう、」という感情と似たものであった。その感情の底にしみ込んでくる在るがままの不満な感じであった。彼はそのうちに浸りながら、「何を為すべき乎」を考えなかった。「何を為すべからざる乎」は猶更考えなかった。ただ「在る」ことを感じていた。それが堪えられないほど侘びしかった。

田原さんは身を起して、二階から下りてゆき、妻と子とに言葉を交わし、それから水で顔と頭とを洗ったのである。すると憂鬱な感情は消えたが、その後頭の中に妙にぼんやりしたものが残ったのである。

田原さんはまた二人の所へ歸つて来た。

其処にはバナナと冷やした牛乳とが出されていた。彼は砂糖の甘い牛乳にバナナをつけて食べた。

「良助はまだ歸つて来ないか。」と田原さんは尋ねた。

「まだですが、もう間もなく歸るでしょう。」

それから田原さんは二階の書齋に上った。毎日午後に昼寝をして、それから夕食まで書齋に籠ることは、彼の殆んど毎日の日課であつた。

書齋には和洋の書籍が沢山つめこまれた本箱が二つ据えてあつて、その中央に紫檀の机が一つあるきりだつた。田原さんはその机に向つて、時には専門の電氣に関する新著を披いたり店の経営に関する考案を廻らしたりすることもあつたが、多くは古今の物語り類を耽読したり、机の上に頬杖をついて外を眺めたりした。家政の余裕と店の地盤の強固とは、彼を多く閑散な地位に置いていたのである。

家は本郷の西片町の高台の外れに在つたので、窓を開け放すと、植物園一帯の高地がすぐ眼の前に展開せられた。その右方に白山の森があり、左方に離れて砲兵工廠の煙筒が聳えていた。田原さんは、或はその静かな森を顧み、或はその渦巻く煤煙を眺めた。そして

その上に、何時も高く拡がっている大空があつた。風の日も雨の日もまた晴れた日も、それらの景色は変らなかつた。

でそれらの土地の起伏や、その上に立ち並んだ人家や、森や、煤煙や、大空や、それらのものを一望のうちにじつと見守っている田原さんの心には、いつも同じような穏かな広やかなものが残された。都会も之を鳥瞰すれば、そして安定な心で鳥瞰すれば、それは一の静かな自然であつた。

然し乍ら田原さんは何かしら退屈して居た。退屈は悪い感情である。田原さんもそれを知っていた。で彼は窓の所に立つて行つて、立ち並んだ人家の一つ一つに眼を定めてみた。洗濯物の物干台に動いている所もあつた。二階の軒先に植木鉢が並べてある所もあつた。枯れかかつて黒ずんでいる樹木もあつた。その向うに大きい銀杏の樹が二本轟然と聳えていた。

その時良助は使から歸つて来た。彼はすぐ二階に呼ばれた。田原さんは、書生兼下男の地位に在るその少年の才能を非常に愛していた。

良助は田原さんの用で、神保町の店まで行つたのであつた。神保町の店というのは田原さんの父の時代からやっている電気器械の商店だつた。

良助は書齋の入口に、きちんと膝を折って坐った。それから店からの返書を差出した。田原さんがそれを読んでいる間じつと控えていた。

「やあ御苦労だった。」と云って田原さんは返書を巻き収めた。

「もう用はないから階下へ行つて勉強するがいい。」

「はい遅くなつてすみませんでした。」

「なに遅くなつてもかまわないんだが、何だか今日はいつもより手間取つたようだね。家へでも廻つたのか。」

「いえ、広田さんが店に居られなかつたものですから。」そう云つて良助は、広田さんが店に居なかつたので、自宅に尋ねてゆき、また連れ立つて店まで帰つて来たことを報告した。広田さんと云うのは、店の方を殆んど預つている主任店員だった。終りに良助はこうつけ加えた。

「広田さんも子供が多かつたりなんかで、種々家の方に用事もあられますようです。それでも止むを得ない用の外は、いつも晩まで店に居られますようですが、丁度今日はお出にならない所に行き合わせましたから、遅くなりました。」

田原さんは口元に笑みを浮べながら、良助のませた言葉をきいていた。そして彼の心に

喜ばしかつたものは、良助の「善意の解釈」であつた。

重夫は父を以て余りに「善意の解釈」をなし過るものとして、常に父の欠点の一に数えていた。それが田原さんを尊敬し心服している伶俐なる良助にも在つた。

田原さんは今、重夫のその言葉を思い出したのである。「善意は度を過せば悪意となる。」と重夫は云つていた。然し田原さんにとっては、善意は常に善意であつた。否それは、善意悪意を通り越した「彼に自然にそうある」ものであつた。そして富と閑散とを有し四十歳を越した彼の心は、それで常に静かであつた。

## 二

過去の話。

その一——

或年の暮れ、神保町の店で一つ不正事が発覚した。感応コイル三個、加減抵抗機二個、及び電流計一個が不足していたのである。帳簿には、それだけの品物は正しく店にはいつてい、代金も支払われているのに、品物は店に無く而も売却せられたことにもなつていな

かった。明かに誰かがそれを途中でかもしくは店から持ち出して瞞着したに相違なかつた。代金約三百円余は店として大したことではなかつたが、事件は不問に附すべきものではなかつた。

田原さんは主任店員の広田を店の二階の自分の室へ呼んだ。

「僕は何も君を責めるわけではない。分つたかね、君を責めるわけではない。然し君も主任店員として一半の責は負わなければならない。で秘密に調査をしてくれないかね。僕よりも君の方が店の内情に通じていると思うから君に頼むんだが……。」

広田は黙つて考えていた。

「どうだろう?」と田原さんはまた云つた。

「然し店の者にむやみに疑をかけるわけにもゆきませんし……。」

広田は当惑そうであつた。

「そうだ、他人に疑をかけるのは悪いことだ。だから秘密にそれとなく調べてくれ給え。」それから田原さんは会計の原口を呼んで、暫く事件を秘密にするように頼んだ。物品の不足を知っているのは田原さんと広田と原口とだけだつた。

それから一週間たつた。然し犯人に就いては何の手掛りもなかつた。

或時原口は田原さんの方へ伺った。そしてこんなことを云った。

「余りに人を信用されるといけません。犯人は意外の所に在るのかも分りませんから」

田原さんは、首を垂れて何やら考え込んでいるらしい原口の方をじつと眺めた。そして云った。

「ああ宜しい。君もよく注意してくれ給え。私わしの方でもそれとなく注意はしているんだから。」

実直な老人の原口は何やら物足りなそうにして帰っていった。

それから数日後のことである。広田が店で田原さんの所へやって来た。

「其後更に見当がつきませんが、少し疑わしい点もありますので、も一度物品を調べて見るとは如何でございましょうか。」

で田原さんは、広田と原口と三人で、再び店の物品を調べてみた。すると前に不足していたものは皆揃っていた。会計の方も別に怪しい点は無かった。

田原さんは、何か云いたそうにしている広田をじつと見ながら、こう云った。

「これで宜しい。何も不足したものがない以上、もう調べる必要もあるまいと思う。ただ



君達に注意しておくが、以後気を付けておいてくれ給え。」

雪になりそうに思える寒いどんよりと曇った日であった。田原さんは椅子に腰掛けながら、瓦斯煖炉の火に輝らされている広田の顔をじつと見つめた。髪を綺麗に分けたその額のあたりに汗がにじんでいた。

「さあもういいから行って事務をとつてくれ給え。」と田原さんは云った。

原口は丁寧にお辞儀をしてさつさと出て行った。広田は室を出る時に一度ちらとふり返つて田原さんの方を盗み見た。田原さんはそれを見落さなかつた。

その晩、田原さんは俥に乗つて広田の飯田町の住居を訪れた。髪を櫛巻にした細君が出て来て、その突然の来訪におどおどしていた。

「急な内談があるので、」と云つて田原さんは座敷に通つて広田の帰りを待った。

四人の子供があつて末の児が病中である家の中に、下女一人の細君はただまごまごしていた。それが田原さんにもよく分つた。

襖の影から男の児が二人指をくわえながら、交る代る田原さんの方を覗いた。

九時すぎに広田は家に帰つて来た。彼は着物も更めないでそのまま田原さんの所へ来て、頭を畳にすりつけん許りにしてお辞儀をした。

「子供が病氣だそうだね。」

「はい。」と広田はただ答えたきり首垂れてしまった。顔色が青ざめていた。

暫く沈黙が続いた後に、田原さんは云い出した。

「僕が突然やって来たわけは君に分っているだろうね。」

「はい。」と広田はまた低く答えた。

「僕は過ぎ去ったことは敢て咎めようとするのではない。然しああいうことは、もし店員全体に分ると悪い影響を及ぼすものだからね。」そして田原さんはじつと広田を見やった。

「以後はよく注意してくれなくては困る。第一君は店の全部を取締る地位に在るではないか。その君自身が……いや僕はもうあのことに就いては何も云わない。君は十分悔悟している筈だから、ただ、このことだけはよく注意しておいて貰わなければならぬ。一度やったことは二度やり易いものだ。いいかね、一度行われたことは、後まで尾を引くものだ。それをよく考えておいてくれなくてはいけない。此度のことは君のためにいい修養だ。それを生かすか否かは全く君自身の力に在る。……僕の云うことは分つたらうね。」

広田は黙って顔を挙げた。頬の筋肉を痙攣さしていた。

「ただ無謀な考えを起さないようにし給え。」と田原さんは云い続けた。「君はまだ四十

に間もある。君の生涯はこれからだ。そして大に店のために働いてくれ給え、店を自分の事業だと思つてね、いいかね。」

それから田原さんは、無雑作に紙幣を百円だけ其処に差出した。

「これは子供の病気に對する僕の心ばかりの見舞いものだ。取つておいてくれ給え。子供の病気はよく面倒を見てやらなければいけない。」

広田は涙をぼろぼろと落した。そして何とも云わないで、ただ頭を低く垂れたままじつとしていた。

「今日は、一寸見舞に來たのだが、余計なことを饒舌つて許してくれ。それでは僕は外に用もあるので……。」

「お心は十分に分りました。以後全く注意いたしますから……。」広田はそれきり何にも云えなかつた。

田原さんは立ち上ると、先刻から襖の影で二人の話をきいていたらしい細君が、眼一杯涙をためてあわてて玄關の式台に田原さんの下駄を揃えた。

田原さんは玄關でも一度広田を呼んだ。

「僕の云つたことは分つたろうね。それから原口へはつつまず事情を話しておく方がいい。

実直な老人だから、話をすればよく分る。ただくれぐれも嘘を云ってはいけない。」

「はい。」と、広田は答えた。

田原さんはそのまま待つていた俵に乗った。

その翌日は雪であった。田原さんはわざと店に出かけないで、雪の降るのを書斎から眺めていた。そしてその晩、広田のことを妻と重夫とに話した。それからこうつけ加えた。

「広田は実際、金が必要であったに違いない。ただ物品をまた店に入れるについて無理をしたかも知れないが、それは反つて彼のためにいいだろう。」

その二——

田原さんの隣りに上坂うえさかという家があった。其処の細君としげ子とはいっしか顔馴染になつて、夏の夕方など静かな通りで立ちながら話をすることが時々あつた。それからまた田原さんの向うへ宇野という人が後に越して来た。其処の細君もいつしか前の二人と親しくなつた。そしてその細君は時々田原さんの家へ遊びに来たり、上坂の家へ遊びに行つたりした。四十許りの子供の無いヒステリックな女であつた。

所がだんだん向うから接近してくるにつれて、宇野の細君はしげ子に種々なことを話し

た。それが皆他人の家の内情に関することであつた。しまいには、その話が上坂の家の方のことに移つていった。——上坂の家は借財のために二度強制執行を受けたことがある。上坂の細君はもと賤しい素性の女であつた、上坂の細君がしげ子のことをお人好しの馬鹿だと云つた、云々。

實際人のいいしげ子はそんな話をただ「左様ですか。」と云つてきき流していた。そして相変わらず上坂の細君とも挨拶を交わしていた。

或時のこと、丁度夕方しげ子が何の気なしに表に立っていると、其処に上坂の細君が通りかかった。しげ子はいつものように挨拶をした。すると上坂の細君は、その挨拶に答えもしないで向うを向いたまま通り過ぎてしまった。

しげ子は何だか変だと思つたがそのままにしておいた。そして暫く上坂の細君と交渉が絶えた。

そのうちに女中の口からおかしな噂を彼女はきき込んだ。彼女が宇野の細君に向つてさうざんに上坂の細君の悪口を云つたそうである。——上坂の細君はもと素性の賤しい女である、お人好しの馬鹿である、云々と。

しげ子はその時になつて凡てのことがはつきり分つて来た。そして温和おとなしい彼女も、宇

野の細君に対して一方ならず腹を立てた。憤慨の余り彼女は夫に向つて、凡てのことを話した。

その時田原さんはこう云つた。

「それはお前が馬鹿だからだ。ああいう人達と一緒になるからいけないんだ。よく自分のことを考えてごらん。お前は今腹を立てている。宇野の細君に対して腹を立てることは、お前自身を宇野の細君と同等の所へ引下げるからだ。あんな者と同じになりたけりや、いくらでも腹を立てるがいいさ。」

「だつて余りあんなまではありませんか。自分で上坂さんの奥さんの悪口をさんざん云つておいて、それを皆私が云つたように上坂さんの奥さんの所で饒舌つたんですもの。腹が立つ位はあたりまえですわ。」

「そうだ、お前が宇野の細君と同じ位な人間だつたら腹が立つのが当り前だ。けれどお前はもつと偉くなつていなけりやいけない。もしお前が宇野の細君よりずっと偉いなら、何も腹を立てるに及ばないさ。他人に対して腹を立てるのは、その者と同じ所に自分を引下げるからだ。何も宇野の細君と同じ者にならなくなつたていい。世の中にはああいう人もある位に思つて上から見下してやればいいんだ。」

しげ子は不満そうな顔をしながらも、それには何とも答えなかった。

それから数ヶ月たった。そのうちにまたいつしかしげ子と上坂の細君とは口を利くようになつた。そして宇野の細君が、二人の間をしきりに離間していることが分つた。そしてまた、宇野の細君は二人の間に立つて妙な地位に陥つた。

その後宇野の家は他へ移転した。

田原さんは云つた。

「ああいう者は世の中にくらも居るものだ。男にも可なりある。然しああいう人の嘘は、それ自身の罪悪じゃない。嘘をつかずに居れないような性格に出来ているのだ。そういう性格に向つて腹を立てるのは、曲つた木に向つて腹を立てるようなものなんだ。真直な木が曲つた木に対して自分と同じ様でないと云つて腹を立てるのは愚かなことだ。腹を立てる方が悪いんだ。」

その三――

或る夏重夫は激しい胃腸加答児に罹つた。

昼夜約十回に余る下痢を催し、三十九度内外の高熱が往来した。激しい渴に対して少量

の飲料しか与えられなかった。医者は毎日便の検査をした。丁度赤痢流行の際だったので、医者はもしやと思つたのである。すぐに看護婦もつけられた。

田原さんはその中を毎日いつもの通り午前中だけ神保町の店に通つた。午後彼は病人の枕辺に坐つてその顔を覗いた。夕方医者が来て診察する間、彼は次の室にじつと待つていた。そして医者から毎日殆んど同じ様な容態をきき取つた。

家の中は凡ての人が静かに立ち働いていたが、静かなままに不安な空気がざわついていた。しげ子はやたらに氣を苛立つていた。彼女はも一人医者を呼び迎えようと提議した。

「その方がよくはありませんでしょうか。」と彼女は夫に云つた。

「そうだね、それもいいかも知れない。」

「それとも今少し様子を見てからにしましょうか。沢田さん（医者の名）も大丈夫だろうと云つていられますから。」

「そうだね。」と田原さんはまた云つた。

「どうしましょう。早くしなければ困るではありませんか。もしか赤痢にでもなつたらどうなさいますか？」

「ではいいようにしてごらんな。」



それでしげ子はすぐに或る専門の大家を呼びにやった。

「だいぶひどいですな。」と云つてその博士は首を傾げた。

田原さんはそういう騒ぎの中にじつと控えていた。そしていつも口をきつと結んでいた。それでも一週間許りのうちに重夫の病気は次第によくなくなっていった。病が急激に來ただけに癒るのも早かった。一週間すると起き上れるようになった。

その時しげ子は夫に云つた。

「もう大丈夫でしょうね。」

「大丈夫さ。」と田原さんも答えた。

「ですけれど、あなた位張合のない人はありませんよ。あんな騒ぎの中にじつと落附いて、何を云つても『そうだね。』と仰言るきりですもの。私はそれでなお苛ら苛らしてくるんですよ。」

「いや病人がある時は落附いていなくちやいけない。それに本当はお前よりか俺の方が余計重夫のことを心配していたんだ。」

「それでももしか手後れでもして赤痢にでもなったら、取り返しがつかないではありませんか。」

「そう。俺はただ種々なことを考えてばかり居たのかも知れないがね……。」

そう云つて田原さんは何とも云えない表情をした。心持ち眉根を寄せて眼を細くした様が、しげ子には丁度泣き顔のように見えた。

でしげ子も妙に悲しくなつてそれ以上何とも云わなかつた。

その四……………

その五……………

三

田原さんは夕方、庭に出て草木に水をやった。それは夏の間の彼の日課の一つだった。冷たい水に昼間の炎熱と埃とが洗い落され甦つたような色に輝いてくる草木の葉は、直接に彼の心に迫つて、彼の心を生々さした。高地芝と飛石とその間に配置せられた松、その右手の奥には大きな岩石が据えられて、蔦の葉が絡んでいた。左手の奥には檜や椎の立木

がこんもりと茂つて、その向うには湯殿の煙筒から煙が上つていた。田原さんはただむやみとその庭に水を濺いだ。飛石の側には小さな松葉牡丹が黄色い花を開いていた。

庭に水をまき、暮れかかつてぽつと明るい大空を仰いだ田原さんの姿は、如何にも静かであつた。心持ち禿げ上つた額と赤味を帯びている濃い口髯とのその顔には、別に何等の感情も浮んでいなかった。彼はただ在るがままの心で空と地との静けさを呼吸した。

良助が其処にやつて来た時、田原さんは縁側に腰掛けていた。

「もう仕度は出来たのか。」と田原さんは云つた。

「はい。」

「それではすぐに行くがいい。そして私が云つたように親父にそう云うんだよ。」

「それでは行つて参ります。」

良助は夜学の包みを手にして田原さんから貰つた金のはいつた封筒を懐にして、家を出た。外に出ると彼は一寸立ち止つてあたりを見廻したが、それから急に足を早めた。彼は仲猿楽町の中央工科大学の夜学に行く途中、弓町の父の家を訪ねばならなかつた。

良助は別に嬉しくもなかつた。それかと云つて悲しくもなかつた。彼はただ自分が、田原さんの云い附けで何かしらぶつかつて行かなければならないもののあるのを感じた。そ

れが自分の實際の父であつた。長い間田原さんの家に俵を引いて仕えていた父であつた。砲兵工廠に働いている父であつた。去年の暮に妻を失つてから酒の中に身を浸している父であつた。田原さんに度々金の無心をしに来る父であつた。何時も酔っぱらっていて、その息は酒臭かつた。

良助はそつと戸口から家の中を覗いてみた。十燭の電気がぼんやりともっている下で、父の徳蔵は食事をしていた。妹のみよ子はもう食事を終えてその側に青い顔をしてじつと坐つていた。二人共執拗に黙り込んでいた。また何かが起つたのに違いなかつた。恐らく父は酒の無いのを幼いみよ子に怒鳴りつけたのである。そして酒に酔つていない彼は、自分と自分の言葉に不快になつて、黙り込んでしまつたのである。

良助は思い切つて家の中にはいつた。

「おや兄さんが……。」そうみよ子は大きい声を出してすぐに立つて来た。

「なに良助か。」

徳蔵はそう云つて腰を立てようとしたが、またどかりと坐り込んでしまつた。そして急に睥めるような眼附をしながら云つた。

「上れよ。」

其処に学校の包みを置いてきちんと膝を折った良助の姿を、徳蔵はじろじろ見やった。

「どうしたんだ。」と彼はまた云った。良助が来たことは彼には全く意外であつたらしい。

良助は黙つて懐から金の封筒を取り出して父の前に置いた。

「旦那様からこれを父<sup>とう</sup>さんにやつてくれと云われたから、学校の途中に一寸寄つたんだよ。」

徳蔵は封筒を取り上げて中を披いてみた。中には一円紙幣が五枚はいつていた。彼はそれを見ると口をぼんやりうち開いたまま、じつと良助の顔を見つめた。

「それはね、」と良助は云った、「旦那様が僕に下すつたんだよ。学校で特待生になつたからその褒美に下すつたんだ。そして、お前がいる時は金は家で出してやるからこれは父さんの所へ持つてゆけと云われたので、持つて来た。父さんの自由に使つていいんだよ。」

徳蔵は暫く何とも云わなかつたが、突然大きい声を出して云った。

「偉い！」

それから彼は急にその紙幣を一枚みよ子の前に投げ出した。

「みよ、すぐに酒を一升買ってこい。いいか一升だよ。それから※を二枚。分つたか。早くするんだ、駈けて行つてくるんだぞ。」

みよ子は云わるるままに急いで表にかけ出していった。

みよ子が出て行つた後に、徳蔵は一寸何やら考えるような風で首を傾げていたが、自分と自分の心に向つて云うかのように口を開いた。

「偉い。お前が特待生になつたんだと。それで旦那がお前に褒美の金をくれた。なるほど。金は家で出してやる。これは親父の所へ持つてゆけ……。さすが旦那は偉いや。お前も偉いや。俺もな、今じゃ飲んだくれだが、これで旦那のためには随分働いたもんだ。」

「よく旦那様は父さんのことを云つていられるよ。そして僕にも大変よくして下さるんだ。しつかり勉強しなけりやいけないうつてよく云つて下さるんだよ。」

「そうだ、若い時に勉強しなけりやいけねえ。お前を奉公に上げる時に、屹度良助は立派な人間に育ててやると旦那は仰言つたんだ。それから俺が家に帰る時にな、もう俵夫は抱えないからこれはお前にやるつてんで、俵を貰つて来たんだ。素敵なものだったぜ。売り飛ばしたら二十両だ。……何だろう、今じゃ旦那は毎日電車で店に通つてるんだらうな。」

「ああ電車だよ。」

「そうだねえ……。徳蔵はそう云いかけたが急に口を噤んでしまった。そして何やら考え込んでゐるらしかった。」

みよ子が重そうにして徳利を抱え※を下げ、帰って来ると、徳蔵は急に眼を輝かした。「どれ。」そう云って彼は立ち上った。それから自分で火鉢の火をかき立てて※をあぶった。

「早く七輪で酒の燗をしな。」と彼はみよ子に怒鳴った。

然し徳蔵はすぐにまた燗をするのを止めさせた。そして冷酒のままそれを餉台の上に置いた。

「お前は、」と彼は良助の方へ向いて云った、「学校があるんだったな。ゆっくりしちやいけねえんだらう。いいから早く此処へ来な。これは祝いの酒だ。特待生になったんだね。一杯飲むがいい。景気をつけなくちやいけねえ。さあ一杯飲みなつたら……。」

「僕は酒は飲めないんだよ。」と良助は答えた。

「なに飲めない？……ああそうか。学校へ行つてゐるうちは飲まないがいいや。脳に悪いんだな。では※でも食うがいい。※は目出度え肴なんだ。おいみよ、お前も食えよ。」

良助はそれで※をつまんだ。徳蔵は、冷酒を食うようにして飲んだ。

やがて良助は云い出した。

「父さんは毎晩酒を飲むのかい。」

「馬鹿なことを云つちやいけねえ。飲みてえのは毎晩飲みてえんだが、誰も飲ましてくれねえやね。」

「でもよく飲むだろう。」

「当り前だ。酒も飲めなくなったら世の中はおしまいだ。」

「だが旦那様もそう云つていられたよ、酒を飲めば世の中はおしまいだって。」

「酒を飲めば世の中はおしまいだと？」

「ああ、」と答えたが、良助は一寸考えた。それからまた云つた。「父さんは死にたいのかね。」

「何を云うんだ籠棒な。誰が死にてえ奴があるもんか。」

「でも何だよ、酒を飲み過すのは自殺をすると同じことだそうだ。度を過すと酒は屹度人の命を縮めるそうだ。それからまた實際死ななくても、始終酒ばかり飲んで何にも出来ないようになるのは、死んだも同じだそうだ。旦那様がよく云つてくれてそう仰言つていらしたよ。父さんに酒を飲むなどは云わないが、良助とみよとが大きくならないうちは決して死んではいけないって。」

徳蔵は杯を下に置いて、じつと良助の顔を見つめた。



「何だ俺に死んではいけないって……。悪い洒落を云うもんじゃねえ。こんなにぴんぴんしていらあね。」

「だからよ、生きながら死ぬなって仰言つたんだ。ただそれだけ分つていればいくら酒は飲んだって構わないんだそうさ。」

「なるほど旦那はうまいことを云うもんだ。」

徳蔵はそう云つたが、一寸小首を傾げて、それからまた杯を手にした。

良助は云うだけのことを云つたという風ですぐに立ち上つた。

「何だもう行くのか。」

「学校が遅くなるから。」

「そうか。まあしつかり勉強するがいい。」そう云つて徳蔵は一寸下唇を舌で嘗めて、じつと良助の方を見やった。

みよ子が門口まで良助を送つて出た。

「兄さんまたお出でよ。」

「ああまた来るがね、父さんはいつもやかましいのかい。」

「いえそうでもないけれど……。」「そして彼女はそのまま俯向いてしまった。」

「僕は学校が遅くなるから、それでは行くよ。今度はゆっくり来ようね。」

みよ子は黙って首肯した。そして良助の後姿を見えなくなるまで見送っていた。

外はまだ薄明るかったが、物の輪廓がぼんやりと暮れかかって、瓦斯の灯が灰白くもつていた。良助は何か考えに沈んだように地面に視線を落したまま足を早めた。夜学の初まる七時はもう少し過ぎていた。

彼の心は淋しい不安なものに囚われていた。未来が余りに漠然としていた。現在のうちに余りに心苦しいものが在った。ただ田原さんが居る以上は何にも心配するものはなかった。然しそのことが、彼に漠然とした不安と心苦しさと物足りなさを与えた。彼はその中でぼんやりと広い社会というようなものを心に浮べて、そして涙ぐまるような窮屈なような感情を覚えた。

#### 四

良助が弓町の家を訪ねた後四、五日して、徳蔵は田原さんの家にやって来た。

彼はいつものように裏口の方から廻って来て、「今日は、」と声をかけた。

其処に丁度居合したしげ子はすぐに徳蔵の姿を見つけた。

「おや徳蔵ですか。この頃暫く姿を見せなかつたではないかえ。」

「へへへ大変御無沙汰をしまして。」

「今日は造兵の方はお休みなのか？……おや、大変な景気だねえ、昼間から赤い顔をして。」

「なに奥様、余り不景気なんだから一寸その景気附けに飲やつたんですよ。所で旦那はお家で。」

「ああ、あちらへ廻つてごらん。」

それで徳蔵は危なそうな足取りで庭から座敷の縁側の方へ廻つた。

田原さんは、その時煽風器の風に身を吹かせて縁側に屈んでいた。

「やあ徳蔵か、どうだこの頃は。」

「へへへ相変わらずでどうも……。」

「相変わらず景気がいいんだな。」

「なに一寸景気附けですよ。お蔭で先達ては久しぶりに溜飲をさげやして、今日はそのお礼に出ましたような訳で。」

「なに礼なんか来なくてもいいさ。あれは良助のために祝つてやつたんだから。お前も

いい息子を持つて合せだね。良助は今に偉い者になるぞ。」

「本当ですか旦那。良助は偉いですかね。」

「ああ偉いとも。だからお前も少ししつかりしなくちやいけない。何だろうな、その調子ではもう先<sup>こないだ</sup>日のものは飲んでしまつたらうな。」

「へへへついでどうも……。」

「まあ飲むのもいいがね、あの時良助は何か云いはしなかつたか。」

「ええ云いましたよ、偉いことを云つたです。ええと、『酒は飲んでも構わない、ただ死んではいけない。』そして……私はどうも覚えが悪いんで外のことは忘れつちまつたが、その言葉だけはちゃんと覚えてるんだ。旦那もうまいこと良助に教えたもんだと、つくづく感心しやしてね……。」

「それで?」

「一つ酒をやめてやろうと決心したんですがね。」

「うまくいかないのか。」

「そうだ、うまくいかねえんですよ。第一うまくいく道理がねえじゃありませんか。酒でも飲まなけりや身体のうち<sup>うち</sup>に火が無くなつてしまいまさあね。私はね、誰かにきいたこと

があるんですよ。人間に一番大事なのは身体の中の火だつてね。その火を消しちやあれこそ本当に死んじまいますかね。」

田原さんは何とも答えしないで、じつと徳蔵の顔を見つめた。日に焼けた顔が酒のために赤く熱っている。濃い眉毛と、低く頑丈な鼻と、厚い唇、それらのものが、夏の炎熱と酒の温気とに燃えてるようである。

「それにね旦那、」と徳蔵は続けた、「外はこの通り暑さに燃えてるんだ、身体の中だつて燃やさなけりやあ調子が取れねえというもんでさあ。それにまた寒けりや寒いでね、内だけでも燃やしておかなけりややりきれねえんですよ。ですがね、私はよく覚えてますさあ。」

『酒は飲んでも構わない。死んではいけない。』それもね、良助に云わせると生意気に聞えるが、旦那の口から出たんだとすりやあ、なるほどいい言葉だ。然し旦那、酒を止す方が早く死んじまいますぜ。火が燃えなくつちやおしまいだ。燃えてるうちは大丈夫生きてるんだ。死人は冷っこいものですぜ。石のようだ。私はね、それは火が燃えてねえからだと思ふんですがね。……ねえ旦那、先夜湯島に火事があったでしょう。豪気なもんでしたぜ。私は真先に駆け付けてよく見てやったですが、真紅な火がごうとうなって、空まで燃えていましたぜ。あたり近所が皆真赤でさあ。風が吹いて真赤な火が渦巻いてるんだ。」

あんな威勢のいいものはありやしねえや。」そして徳蔵は一寸首を傾げて考えたが、また云い続けた。「旦那は夕焼のした晩に酔っぱらったことがあるんですか。火事という奴はあれと丸で同じでさあ。あたりのものがぐるぐる廻ってるんだ。それがぱつと真赤になつてるんだ。空に真赤な夕焼がしているんですぜ。空も地面も真赤になつて渦巻いてるんだ。そして一度に燃え上つてる。どうすることも出来やしねえ。腕っ節の続く限り何にでもぶつかつてゆくんだ。戦争なんかもあんなものかも知れねえ。」

徳蔵は一人で饒舌つてしまうと、急に口を噤んで、先刻出されたままの茶をぐつと飲み干した。それから彼はふと煽風器の方へ眼を留めた。

「なるほどいい風が来ますね。だが、どうも生なまあつたか温い風ですな旦那。この風を冷たくする工夫はつかねえものですかね。」

「そうだね。」

田原さんは気の無さそうな返事をした。そして紙巻煙草を一本取つてそれに火をつけ、また一本徳蔵にも取つてやつた。

「今日は造兵の方は休みなのか。」と田原さんは別のことを云つた。

「なに一寸骨休めですよ。あの仕事も随分骨が折れますよ。働きづめで、一服する隙もあ

りませんかね。」

「それは骨も折れるだろうが、そう休んでいてはみよ子が困りはしないかね。」

「なあに、大丈夫でさあ。その代りよく可愛がつてやりますんだ。あれも不憫な奴ですからね。よく膝の上に抱っこして子守唄をうたってやりますよ。するとね、眠ろうとはしないで、嘔き出してしまふんです。私もね、一緒になつて笑ふんです。何しろもう十二になるんですからね。然し慍口ですよ。私が造兵から帰つて来て寝ようとする、肩を揉んでくれますよ。」

「然しよく怒鳴りつけることもあるんだろう。」

「それはね、ただ酒がねえ時でさあ。然し不思議なもんですよ。酒が無くつて怒鳴り散らすと、丁度酒を飲んだような気持ちになりますんだ。心が煮えくり返るようでね。そんな時に私は膝に抱っこしてやるんですがね、そして子守唄をうたうんです。すると大抵は二人で笑い出すんですがね。どうかすると奴さんやつこ泣き出しちまうんです。私もね、つい鼻を撮るんですがね。……いや火を燃すに限るですよ。泣くなんて余りいい気持ちのものじゃねえ。どうも泣くのはいけねえや。私はこう思いますがね、人間てものは始終火を燃していなけりやいけねえと。」

「然しね、酒で火を燃さなくても、他のもので燃した方がいよ。」

「そりや、旦那みたようだと、そういきましようがね。私等には、うまくいかねえですよ。何しろ裸一貫ですからね。」

田原さんはじつと徳蔵の顔を見つめた。

「お前は家内を亡くしたのがいけなかつたんだね。」

徳蔵はその言葉をきくと、急に腰を立ちかけたが、またそのまま身を屈めた。

「旦那、死んだ奴のことは余り考えるものじゃありませんね。」

その言葉は田原さんには非難の言のように響いた。で彼は何とも云わないで徳蔵の方をじつと見やると、徳蔵は殆んど無感覚のような没表情な顔をして、ぼんやり視線を向うの庭石に定めていた。

庭はもう一面に日が陰っていたが、傾いた太陽の光りを含んでぎらぎらと輝いている空からは、炎熱の余光が地上に降り濺いで、物の隅々まで影の無い明るみを作っていた。二人はそれきり黙ったまま、ぼんやり庭の方を眺めた。風も無い庭の木立が、如何にも静まり返っていた。

その時女中が田原さんに、お湯の沸いたことを知らして来た。



徳蔵はその時急に立ち上つて帰ろうとした。

「おい一寸待つてくれ。」

田原さんはそう云いながら立つて行つて、何程かの金を紙に包んで、それを徳蔵に与えた。

「いや旦那、これは頂けませんや。」

そして徳蔵はその包みを縁側に置いた。

「なぜだ？ 取つておけばいいじゃないか。」

「なぜでもいけませんや。」

「なにいくらでもないんだから取つておおき。そしてそのうちで何かみよ子に買つていつてやるがいい。」

徳蔵は急に眼を輝かした。

「それじゃ頂きます。みよは饅頭が好きだから、一つ馬鹿に大きいやつを買つていつて喜ばしてやりましょう。……それじゃ旦那、大変お邪魔をしちゃいました。」

徳蔵は丁寧に頭を下げた。それから勝手の方へ廻つてしげ子に挨拶をして、帰つて行つた。酔もさめたらしく、重い足取りをして歩いていった。

田原さんはそれから庭に水を撒き、湯にはいり、夕食の膳に向つた。然し彼は内心が妙に疲れていた。それも彼自らが称して「最も悪い疲労」と云つていた所の倦怠に似た疲労だった。

田原さんは心持ち眉を顰めて、そして黙り込んで少ししか食わなかつた。始終重夫が自分の方をじろじろ見ているような気がした。

食後重夫はやさしい調子でこう父に話しかけた。

「今日もいつものように徳蔵に金をやられたんですか。」

「ああ少しくれてやった。」

田原さんはただそう答えた。声の調子は如何にも落ち附いていた。

「然しああ云うずぼらな奴にいつも黙つて金をやると、益々凶に乗つて来ますよ。」

「なに大丈夫だ。それに私は<sup>わし</sup>だんだん徳蔵の気持ち<sup>わし</sup>が分つて来るような気がするんだ。」

「お父さんはいつもそんなことばかり仰言るんですけれど、ちつとも物に価値の区別をつけられないんですね。お父さんのはいつも解釈ばかりなんです。それも余りに善意な解釈ばかりなんです。少しも判断ということ<sup>わし</sup>をなさらないんです。」

哲学に興味を有し高等学校の独法科に通つている重夫にとっては、凡てのことに判断と

裁決とを要するのであった。彼の持論はこうであつた。単なる解釈は社会を向上させはしない。社会を向上させるには判断と裁決とを要する。其処から彼は時として、尊敬する父に対しても抗議を提出することがあつた。彼の眼はいつも若々しく輝いていた。頬には紅い血が流れていた。凡てにぶつかつてゆく力が彼のうちに充ちていた。

田原さんは重夫の方へちらと一瞥を与えて、それから静かに答えた。

「判断は理解の後に来るものだ。然しそんな抽象的な議論はお前達のような若い者に譲るとしよう。だがお前にはまだ人間というものがはつきり分つてはいない。……何だったかね、そうそう徳蔵のことだ。妻を失つたことが徳蔵にどんな打撃を与えたか、お前には分るまい。お前も知つてる通り、徳蔵はこの家から出て後ずつと砲兵工廠に働いていた。彼の妻は家の中で内職をしていた。そして貧しい中に良助とみよ子とを育てていたんだ。そのうちに突然妻が死んだ。良助は今の通り家に来ることになった。徳蔵はその時から酒を飲み出したんだ。今日も彼は云っていた。『人間には心の中に火を燃すことが大事だ。私等のような者は酒で火を燃すより外仕方がない。』そのことをよく考えてごらん。今分らなくても、お前にもいつかそのことがはつきり分る時が来る。」

重夫は珍らしい父の雄弁にじつと耳を傾けていたが、やがて云つた。

「私にも大体は分ります。然しただ分つただけで、その先をどうしようということがなくちゃ、何にもならないじゃありませんか。」

「何にもならないと云えばそれまでだがね……。」

その時田原さんは、眼の下に細い皺を寄せて苦々しい微笑を洩らした。田原さんがその苦笑を人に示すことは極めて稀であつた。で重夫も、何か父を苦しめることのように感じて、そのまま口を噤んでしまった。

田原さんはそれから急に散歩に出た。九時すぎに彼は帰つて来た。それから一時間許り二階の書齋に上つていた。そしてまた下りて来て此度は庭を歩き廻つた。

木の葉一つ揺がない静まり返つた夜であつたが、庭の中には何処からともなく涼しい空気が流れていた。空には星がきらきら光つていた。軒先に蒼白い光りが流れているのを見ると、月も出ているらしかった。その地上の暗い夜の静けさと、空から洩れる明るみとが、妙に不調和な雰囲気を作つて人の心を唆かした。

田原さんは唇をきつと結んで、時々立ち止つた。そして空を仰いで肩を聳かしたが、またすぐに植込の向うに見える灯をすかして見たりした。やがて彼は何ということもなく、座敷の方から玄関の方へ歩いていった。

と急に彼は立ち止って瞳を凝らした。玄関の横の四畳半の縁側に黒い人影が佇んでいたのである。それが良助であると分ると、田原さんは初めて声を掛けた。

「良助か。何をしているんだ？」

「旦那様でございますか。只今学校から帰って来て復習をすましたので……。」

「ああそうか。下りて来ないか、いい晩だよ。」

良助は云わるるままに庭下駄をつつけて下りて来た。そしてそのまま歩き出した。田原さんの側に影のように寄り添って歩いた。二人共何とも云わなかった。

やがて良助の方から口を開いた。

「今日父がやって参りましたそうでございますが。」

「ああ。」と田原さんは一寸ふり向いた。

「何か云って居りましたでしょうか。また酒を飲んではいませんか？ ございましたか。」

「酔っていたよ。そして人間は心のうちに火を燃さなければいけないと云っていた。」

良助はその意味を推しかねて黙っていた。

「酒を飲んで心の中の火を燃すんだと云っていた。」

良助はなお黙っていた。

「お前の父が云うのは真理だ。人間が他の動物より強くなつたのは火を燃す方法を知つてからなんだ。そして他の動物より賢くなつたのは心の火を燃し初めてからだ。お前はプロメシウスの神話を知っているだろう。天上から火を盗んで来た為にコーカサス山の上に縛られて禿鷹に肝臓を啄まれたというあの話だ。人間は火を燃さなければいけない、然しそのためにまた心に苦悩を覚ゆるのだ。」

良助はなお黙っていた。

「先夜湯島に火事があつたらう。お前の父はあれを初めから見ているさうだ。そうして今更に火事を感じしていた。」

良助はなお黙っていた。

「それから、夕焼のした晩に酔つぱらうと、丸で火事の中に居るようなものと云つていた。あたりが真紅になつて渦巻くさうだ。」

良助はなお黙っていた。

「お前の父は、酒が飲めなくなると、放火でもするかも知れない。」

その言葉をきくと、良助は急に田原さんの側に寄つていつて、黙つてその顔を仰ぎ見た。田原さんもじつと良助の眼の中を覗き込んだ。そして云つた。

「いや誰にも、うっかりした瞬間には放火をしたくなるものがあるものだ！」

それは殆んど投げつけるような調子であったが、良助は別に驚きもせず、身退しじろぎもしなかつた。彼はただじつと田原さんの側に立ちつくした。

田原さんはまた一歩歩き出した。すると良助も田原さんに引きずられるようにして一歩運んだ。そして二人は黙々として庭の中を歩き廻つた。背の高い口髭の濃い成年の姿と、髪を短く刈つた背の低い少年の姿と、二つは物とその影のように相並んで、庭の植込の間をぐるぐると廻つた。

濃い闇がしいんと静まり返りながら、空の仄蒼い反映を漂わしていた。黒い松の向うには、庭石が白く浮出して、芝生の葉末がきらきらと光っていた。

田原さんはふと何かに喫驚して我に帰つたように立ち止つた。そして良助の方へふり返つた。

「もう寝るがいい。」

その声は何処か力が抜けて空洞のような響きをした。

「はい。」と良助は答えた。

田原さんは其処に良助を残したまま、ずんずん家の中にはいつていつた。

## 五

徳蔵は月に三、四回は必ず田原さんの所へやって来た。

そしてみよ子は毎朝田原さんの家に牛乳を配達して来た。

牛乳の配達は十二の少女としては可なり収入のある仕事であった。彼女は乳屋から十本余りの牛乳を受けてそれを朝早く配達した。乳屋の方にも客の方にも此の可憐な少女に対する同情があつた。然し冬の寒い時など、それは可なり彼女にとつて痛々しい仕事であつた。耳朶みみたぶは大きく凍傷のために脹れ上り、頬は赤くかじかんでいた。そして手足が氷のように冷え切つた。それが春になり夏になると、耳朶は小さく薄くなつて赤い血管がすいて見え、頬には幼い色が上つて、白い柔かな産毛がかすかに見られた。

彼女はいつも、勝手に牛乳を届け空壇を貰うと、兄の姿が見えはしないかと思つて其処に暫く佇んだ。彼女の眼は悲しそうに円く輝いていた。そして其処で彼女は時々兄に逢つた。

みよ子の方では別に話すことも持たなかつた。否恐らく種々こまかいことを持つてはい



たろうけれど、そういう時には心がその方へ向いてはいなかった。良助の方も別に話すこともなかった。二人は黙つてじつと立っていることがよくあった。

然し特にそんな時に良助は田原さんの眼を恐れていた。一度もそれについて何か云われたり尋ねられたりしたことはなかったのだが、それでも彼は田原さんの眼を恐れた。それは単なる気兼や遠慮ばかりではなかった。彼はいつも田原さんの眼が何処からかじつと自分の方を見守っているような気がした。そしてその眼が自分の心のうちにも在るような気がした。

良助はよくふいと妹の許を立ち去つた。みよ子は其処に置きざりにせられて、じつと兄の後姿を見送り、それから牛乳の壘の籠を取上げ、首垂れながら田原さんの家から出ていった。

然しみよ子のその悲しみは、しげ子や重夫の親切で幾分慰められた。しげ子はよくやさしい言葉をかけてくれた。重夫は時々菓子などをくれたり、小遣錢を与えたりした。そして月末の勘定の時、みよ子はいつも釣錢をそのままに貰つていった。そういう時みよ子は、涙ぐんだように眼を円く見開いて相手の顔をじつと仰いだ。そして黙つてお辞儀をした。

「悪に対しては常に抵抗しなければいけない、そして善は常に保護しなければいけない。」

それが重夫の信条であった。そして彼にとつては、徳蔵は悪であり、みよ子は善であった。重夫は屢々みよ子のことを父に話した。

「この次には小遣を少しやりましょう。」と彼は話の終りによく云った。

「それがいい。」と田原さんは答えた。

然しそんな時田原さんはいつも重夫から眼を外らして、そして苛ら苛らしたような表情を示した。

心持ち眉根を寄せて半ば口を開いているその横顔は、或る不安なものを重夫の心に伝えた。

重夫は心のうちで思った。「父は常に悪に対する善意の解釈のみを事としている。善そのものは父の何等の興味をも引かないんだ。」

重夫のその心持ちが田原さんにははつきり分っていた。そして田原さんは益々苦々しくなった。

田原さんにとつては重夫の考えている問題は問題ではなかった。それでは何が問題か？ それには何も答えられなかった。田原さんは書齋に上ってみたり、散歩を試みたり、それからまた毎日午前中は神保町の店に通った。そして何だかじつとして居れないような

気になっていたが、そのままにまた彼自身も彼の日々も至って静かで落ち附いていた。

或日田原さんは妙に腹を立てていた。夕方まで昼寝から覚めないで、急に食事の時になつて起されたからであつた。腹を立てているというのが悪ければ、不愉快な気分になりなつたと云つてもいいだろう。彼は殆んど一言も口を利かないで夕食を済ました。

なぜ不愉快な気分になりなつたか？ それは彼自身にもはつきり分らなかつた。然し兎に角田原さんはその日、白日のうちにそして静かな夢幻のうちに自然に眠りから醒めてゆくかの心の置場の無いような寂寥と憂愁とを、ゆっくり感ずるの隙が無かつたのは事実であつた。

「あなた、あなた、あのもう夕御飯も出来ていますから……。」しげ子はそう云つて田原さんを揺り起した。

で田原さんは急に、微睡からよび覚された。そして彼が昼寝をしたのは午後の真昼であつたが、起きた時は既に夕暮の影が迫つていた。彼の心理の過程のうちに何処か隙間があつた。

食後彼は縁側に屈んで庭を眺めた。庭にはいつも彼がするように水が撒いてあつた。木の葉に水の掛かつた有様から庭石の凹みに水がたまっている工合まで、いつも彼自身がや

るのと少しも違っていないかった。

田原さんは、夜学に通うため仕度をして出て来た良助に云った。

「お前が水を撒いたのか。」

「はい。」と良助は答えた。

「よく私がいつもやる通りに覚えていてね。」

「はい、何でも旦那様のやらるることを覚えておかなければいけないと思って、平素から注意して居りますので。」

「それでは私が万事お前の理想となるわけだね。」

「……………」

田原さんはその時、自分の云ったその言葉に妙に不安になった。自分は始終良助からつき纏われている、というような漠然とした感じを懐いたのである。そしてその感じはどうすることも出来ないようなものだった。

然し顧みて、夜学の包みを持ち短く袴をはいているその少年の姿を見ると、田原さんは急に何だか馬鹿馬鹿しくなった。敏感な頭のいい少年だったが、それはやはり少年だった。「もう時間だろう、出かけたらどうだ。」

ややあつて田原さんはそう云つた。

「はい別に御用はございませんですか。」

「ああ何もないから。」

「それでは行つて参ります。」

良助はそう云つて、約三十秒許り田原さんの側にじつと立っていた。それから急いで家を出た。

田原さんもその後で散歩に出た。

二時間許りして彼は帰つて来た。そしてすぐに重夫の所へ行つた。

「先刻徳蔵に逢つたよ。」と田原さんは云つた。

「そうですか。」と重夫は気の無さそうな返事をした。

「大変真面目な顔をしていた。そしてこんなことを云うんだ、『余りお世話になつてゐるんで、旦那の家へはどうも白面しろつでは何い悪うござんして。』とね。あれで酒を飲まなければ正直ない奴だ。」

「お父さんが、酒を飲めるようにしておやりになるからいけないんですよ。」

「なにそればかりじゃない。それに、彼に急に酒をやめさせると却つていけないかも知れ

ないんだ。」

「そんなことを云つたらきりがないじゃありませんか。」

「いや或る習慣が出来たり無くなつたりするには一定の時期があるものだ。」

「それでもお父さんは余りに寛大すぎますよ。」

「そう……。」

田原さんは何やら云いかけたが、そのままぶつりと言葉を切ってしまった。それで重夫もそれきり口を噤んだ。

その晩田原さんは遅くまで眠れなかった。室の中が、そして蚊帳の中が妙に暑苦しかったので、彼はそつと起き出て、縁側の雨戸を開いた。

星明りの、そして空気が澄み切つた静かな晩だった。田原さんは庭に下りて行つて大きく胸を開いて呼吸をした。それから急に庭の隅々を透し見た。何だか人の気配がしたようであった。然し其処には誰も居なかつた。ただ植込の下影が、脅かすように真暗であった。

田原さんは庭の中を歩き出した。そして暫くすると、彼はいつのまにか、良助が寝ている玄関横の四畳半の戸口に近寄っていた。そして彼はその戸口から耳を澄した。戸は閉め切つたままで、中からは何の物音もしなかつた。

時間が静かに過ぎていった。

と突然田原さんは一歩退った。そして急に我に返ったようにあたりを見廻した。頭が硝子のように恐ろしくはつきりしているのを彼は感じた。それから何かに対して身構えるかのように、彼は両肩を後ろに引いてしかと拳を握りしめた。

彼はそのままの姿勢で、また座敷の庭の方へ戻つて来た。それは上半身だけが物に慳えて硬ばつたようなおかしな姿だった。先刻開け放したままの戸が一枚、ぽかりと口を開いていた。彼はずつと其処にはいつて行つた。

## 六

八月のじりじりと輝りつける或る日の午後、一群の野次馬が一人の巡査と泥酔の男との後について、ぞろぞろと田原さんの家の前までやって来た。炎熱と埃と汗の匂いが、一時にその閑静な通りをざわつかした。然し誰も皆黙っていた。黙って額の汗を拭いて、また酔漢よいどれの方を覗いた。酔漢は巡査に片手を取られたままのそりのそり歩いていった。黒眼が上眼瞼に引きつけて、じつと前方を睥んでいるようであった。

二人は田原さんの門の中にはいった。野次馬の一群は其処にとり残されて、やはり黙ったまま門内を覗き込んだ。そしてやがて二、三人ずつ散っていった。

巡査は玄関に立つて、其処に出て来た田原さんに次のようなことを云った。

「この男が大道にいきなり坐ってしまったのです。いくら叱つても賺しても立ちません。泥酔してその上暑い日に輝らされたせいでしょう。住所をきくとただ、『田原の旦那の所へ行くんだ。』と答えるきりです。仕方がないから、お宅へ送つてやると云うと黙つて立ち上つて歩き出しました。あなたの御存じの男ですか。」

田原さんは玄関にぼんやり屈んでいる男——徳蔵の上に、じつと眼を定めた。細い縞の浴衣が埃にまみれている。はだけた胸からは黒い胸毛が見えて、大きく喘ぐように息をしていた。

「ええ、」と田原さんは答えた。「もと、家に使つていた男です。決して怪しい者ではありませんから、どうか私に任しておいて下されば仕合せですが。」

それで巡査はほつと安心したらしく、ポケットから手帳を取り出して、一応田原さんの名前とそれから徳蔵の住所氏名とを書き留めた。そして、「お邪魔でした。」と云い残して出て行った。



田原さんは暫くつつ立つたまま徳蔵の姿を見守っていたが、やがて女中に命じて彼を良助の室に寝かせようとした。徳蔵は黙つて女中の後に随つて庭の方に廻つたが、其処の縁側からどうしても上ろうとしなかつた。

「此処でいいんだ！」と彼は女中に怒鳴りつけた。

仕方がないので縁側に蓆を敷いてやると、彼はその上にすぐごろりと寝てしまった。そして差出されたコップの水をごくりと一口のんで、そのまま大きい鼾をかいて眠ってしまった。

その騒ぎが静まると、家の中は急にまた蒸し暑く感ぜられて来た。じじじじと何処かで蝉の鳴く声があった。

田原さんはその暑さに聞き入るようにして茶の間に坐っていたが、時々立つていつて徳蔵の方を覗いた。徳蔵は胸をはだけ、枕から頭を滑らして喉仏を露わし、手足を伸べて、ぐつすり寝込んでいた。その全身をぐたりと縁側の上に托した寝姿は、如何にも暑苦しかった。庭には木の葉が強い日光にきらきら輝いていた。

田原さんは懶い表情をしてぼんやりまた茶の間に坐り込んだ。

「あなたは徳蔵のことばかり気にしていらっしゃるのですね。」としげ子が微笑みながら

云った。

田原さんにはそれには何とも答えなかった。

四時頃、徳蔵が巡査につれられて来てから一時間半ばかりたった頃、芝に使いに行った良助が帰って来た。田原さんは急に生々した表情をした。

「御苦労だった。暑かったろうね。」

良助は袴のまま其処に坐った。

「あの明晩こちらへ何うから宜しくつてそう仰言つていられました。」

「ああそうか、川口さんに逢ったのか。」

「はい。そして御馳走になつて来ました。」

「それはよかつた。まあ身体でも拭いて来るがいい。」

その時表の方の縁側で何か音がした。それをきくと田原さんは俄に陰鬱な顔をして立ち上った。

良助はただわけもなく田原さんの後について行つた。

徳蔵は上半身を起してぼかんとして縁側に腰掛けていた。

「どうだ気分は！」と田原さんは苛ら苛らしたような調子で尋ねた。

徳蔵はふり返つて田原さんを見ると、急に二三度お辞儀をした。

「どうだ気分は？」と田原さんはまた尋ねた。

「いえもうすつかりいいんです。なにその一寸……。」

徳蔵はふと言葉を切つて何やら考えていたが、それがどうしても思い出せない風であつた。

「冷めたいのを一杯飲まないか。その方が頭がはつきりしていいよ。」

それをきくと徳蔵は急に眼を瞬いた。そして縁側から離れて立ち上つた。凡てが漸く記憶に甦つてきたらしかつた。

「いや旦那、もう御免被ります。この上やつたら死んじやいまさあ。いや豪い目に逢いましたよ。身体中がぎらぎら燃え出しちまつたんですよ。真紅に燃える奴あ平気ですがね、ぎらぎら燃える奴ときたらかないませんや。頭にがーんときたんですよ。眼が眩んじまいますね。……相済みません。水を一杯頂きてえんですが。」

「水をくんでおいで。」と田原さんはふり返つて良助に云つた。

その時徳蔵は初めて其処に田原さん一人でないことを知つたらしく、顔を挙げると、次の間の襖の影に立っている良助の姿を見出した。それから彼は眼を落して縁側に敷いてあ

る蓆を見た。

徳蔵は黙って蓆を畳んで片隅に押しやった。

やがて彼は良助が持つて来たコップの水をぐつと飲み干した。そして黙ってまたそのコップを差出した。良助はまたそれに一杯水を注いで来てやると、彼はそれをも一息に飲み干した。

彼はコップを下に置くと、良助の袴姿をじろじろ見ていたが、それから田原さんの方に向いて頭を下げた。

「とんだ御厄介になりました。もう大丈夫です。」

そう云って彼は帰りかけた。

「まあゆつくり休んでゆくがいい。」と田原さんは声をかけた。

「なに大丈夫です。相済みません。これからもう酒はきっぱり止よしちまいます。全くです。……おい良助、お前もな、しつかり勉強しなよ。」

徳蔵は逃げるようにして出て行ってしまった。

良助は其処に立ったまま黙って父の後姿を見つめていた。

その時田原さんは妙に不機嫌な顔をした。何か忌々しいものが、対象のない漠然とした

忌々しさが、彼の頭に絡んできた。そして黙っていた。

その時良助は田原さんの方へ向いて云った。

「父はどうしたんでございましょう。」

「なに、酒に酔って来たから寝かしておいたんだ。」

「それでも何か、ぎらぎら燃え上って頭にがーんとぶつつかったとか云っていましたが。」

「昼間泥酔したせいだろう。……自分で自分の身体に火をつけてるんだ。」

良助は黙っていた。

「なに心配することはない。酒は止すと云っていたじゃないか。……早く袴でも取って水でも浴びて来るがいい。」

田原さんはそう云ったまま二階に上っていった。良助は一步その後に従ったが、また頭を振って自分の室にはいった。

田原さんの不機嫌な顔と何かしら妙に忌々しい感情とは、その夕方まで続いた。

そしてその晩、重夫はこんなことを云った。

「徳蔵のような奴は早くどうにかしなればとんだ迷惑を及ぼしますよ。」

「なに大変正直な奴なんだ。ただ酒をのむのがいけないんだ。」と田原さんは答えた。

「それは正直は正直でしょうが、愚かだから危険です。切端つまった場合にはどんなことをするか分かりません。それに泥酔の癖がありますから……。」

田原さんはそれには何とも答えなかつた。そしてそのために益々不機嫌になつた。その不機嫌さが神経に絡みついて、眉根をぴくぴく震わした。

そんなことは田原さんには珍らしかつた。いつも落ち附いてじつと構え込んでいる彼には、そんなことは実際非常に稀にしかなかつた。で重夫もしげ子も妙にその晩は黙り込んでしまつた。

その夜、田原さんは早くから床にはいつた。良助が夜学から歸つて来て、「旦那様は？」と女中にきいた時は、田原さんはいつになく熟睡していた。

夜半よよなかに田原さんは眼を覚した。家の中はひっそりと静まり返つていた。そして彼の心も如何にも静かであつた。ただぼんやり眼を開いていると、何処からか、ぼたり……ぼたりと物の滴るような音が聞えた。それは何時までも止まなかつた。そしてしまいには彼の頭に執拗にまといついて来た。その鈍な重い物音が、おつ被さるやうに彼の頭のしん芯に響いた。田原さんは長い間考えていたが、漸次その物音の場所を探しあてたやうに急に起き上つた。勝手元に行つてみると、それはやはり、水道の水が流し場の坂敷の上に洩れているの

であった。水道の螺旋をしめると、水の滴る音はぴたりと止んだ。そして家の中が俄にしんとしてきた。

田原さんはまた床の中にはいったが、蚊帳越しに見える五燭の電気の光りが、彼の眼をちらちら刺激した。それでまた起き上って電気を消した。

後はただ暗闇と静寂とだけであった。暫くじつとその暗を見つめていると、何時の間にか後はまたうとうととした。

それからどれほど経ったが分らないが或はすぐ間もなくであったかも知れない。外をゴトと凄じい音を立てて風が荒れ狂っている、と田原さんは思った。激しい風は軒と軒と、木の間とを分けて、吹き過ぎた。そしてその風の間、物の隅にちらちらと赤く光るものがあった。じつと見つめていると、やがてそれが大きい焰になって燃え初めた。と人影が一つずつと何処かへ走った。焰は渦を巻いて家に燃え移った。そして彼はいつのまにかその焰にとりまかれていた。「しまった！」と思うと田原さんは眼を覚した。

それは殆んど一瞬間に起った幻だった。然しその意識が如何にもはつきりして、醒めた後の意識とすぐに続いていた。ただ風の音と焰とが、静けさと闇とに代ったのみであった。耳を澄すと庭の方に当って人の気配がした。誰かが足音を盗んで窺い寄っているらしかつ

た。

田原さんは起き上って帯をしめ直した。それから暗闇の中で、用心のために戸棚からピストルを取り出して弾丸をこめた。

彼はそつと雨戸に近寄って、音のしないように静かに一枚戸を開いた。

重くどんよりと曇った夜であった。庭の中は、仄蒼くぼんやりした明るみが空気の中に在った。透し見ると向うの白く浮き出した庭石の上に、人の影が蹲っていた。

田原さんは少しも驚きはしなかった。凡てが予期した通りであった。そして彼は頭がはつきりしているのを感じた。恐ろしいほど澄み切ってはつきりしているのを感じた。手のピストルに眼をやると、それは銀色に冷たく光っていた。凡てが恐ろしいほど澄み切っていた。そしてそのままに身落ち着いていた。静かであった。

田原さんはじつと人影を見つめた。

その男は長い間石の上に蹲っていた。それから、袂にマッチを探って、紙巻煙草に火をつけた。煙草の先がぼつと燃えたが、すぐに消えた。それから男は立ち上った。首を垂れながら歩き出したが、五六歩すると何かに躓いたように飛び上った。ばさつという音がした。男は其処に立ち止ってじつと地面を見つめていたが、梧桐の枯葉を一枚拾い取った。



それをうち振りながら男はまた数歩した。と突然男は堪えられないような身振りをした。そしていきなりマツチを擦つてその枯葉に火を移した。ぼつと焰が立った。

それらのことが、仄かな明るみを堪えた暗闇の中に、ぼんやり拡大した輪廓を以て田原さんの眼に映じた。そして梧桐の葉がぼつと燃え上った時に、田原さんの頭の透徹と神経の集中とは極度に達した。

「誰だ！」と田原さんは怒鳴った。

男は駭然としてふり返った。

その瞬間田原さんは男の下に向つてピストルを発射した。轟然たる音が闇の中に響いて男はぼつと地上に倒れた。

殆んどそれと同時にあつた、田原さんは「しまった！」とピストルを持っている手先に感じた。彼はそれでもきつと唇をかみしめながら、静に跣足のまま庭に下りていった。片手に燃え残った枯葉を掴んだまま良助が左の胸を貫通せられて倒れていた。

田原さんは其処に立ち凍んだ。そして何か腑に落ちないように頭を傾げた。



# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第一卷（小説1【#「1」はローマ数字、1-13-21】）」未来社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「黒潮」

1917（大正6）年8月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：松永正敏

2008年10月19日作成

2010年9月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 田原氏の犯罪

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>